

抄日本書紀を考ふるに、開闢已來、景行天皇御巡狩の時火の國のさたあり云
今の函肥のことなりへ火の國のこと下に記す。し

又外に天草風土考といふ一冊あり。是古の風土記によりて委しく記
す書也。其中に神功皇后御着船の事ありて、今御所浦といふもあり。新古
毛利宗意軒、由井正雪出會の場所、今当嶋大矢野のうち、柳の瀬戸といふ
に宗意軒が墓と稱るあり。外に古城跡數多これあり。されども何者の居城
といふ事具に知れず。中古上津浦上総介といふ者、当嶋を領せしよし、又
其後五人衆というて、天草伊豆守、志岐林仙、木山彈正（清正と合戦の
こと本功記にあり。戦の場もあり。栖本興吉郎、大矢野治郎兵衛（治郎兵衛一名明石
源正といふ）と云ふ五人の若領せしを、秀吉公御征伐ありて、天正の頃は小西
攝津守行長所領となる。小西滅亡の後、加藤清正領地となり、夫より又、
押移、寺沢忠摩所領分となる。此時總高四万石也。時に耶蘇宗門相起り、
益田四郎といふもの諸浪人を相集め、當嶋并肥前高來郡両所及大乱、終に
寛永年中、一旦忘地と相成（別記あり）其後諸國より入人有之。人家出來、
公料に相成、御代官鈴木何某のはからひにて、惣高二万石減知あり。百
姓御取立、猶亦邪宗門爲退治、淨土宗七ヶ寺（今廿九ヶ寺）檀宗十四ヶ寺、真
言宗一ヶ寺御建立ありて、各寺へ寺領地御寄附有之、宗門方取締ありて、
復古天草となりぬ。外に東西一向宗もあれ共、これは何等の御沙汰も無之

除地といふもなし。

初今は長崎御代官高木氏支配所にて、當嶋富岡（臥龍城といふて名城なりしを）取つふし、今町となり陣屋あり。故に城下元といふなり。古城跡に陣屋ありて、御政事御嚴重の事也。

初火の國のことを景行天皇御巡狩の頃、今の肥後國葦北の地へ行幸の時、海上に數多火あり。此火あゝの火といふことを知らず。此火あるをもつて、國名を火の國とせしより、後に火の字をあらためて肥につくり、肥前・肥後兩國となせし也。此時日本三十三ヶ國なりしを、其後又あらためて、百四十四ヶ國とせし事もあり。其時は當嶋も天草國といふ一國也。今は中古に復し六十六國にして、天草は肥後のうち也。此火の事、今に七月廿九日の夜、當嶋と肥後八代郡との間、海上に數万の火見ゆ。是何の火といふことと知れず。故にこれを知らぬ火といふ。又此邊外にも時々海上に火の見ゆることあれども時日定りなし。是古來詩歌に題せる「不知火」也。

扱又當嶋山々多しといへども兎・狼・熊の類一疋も住まず、此外いろいゝろあれども記すにいとまなし。唯やつがれどもが配所なるゆえ、扱しき所とのみ故郷の人、おもふべきことを察し、おもひ出すまゝ筆にまかせて、あるすのみ。

我が配所は僅に四百石高の村なれども、材の廣さ、長二里、横壹里餘に

て山多くありて、年々山より出る木材、薪炭等の物成凡三千五百両余、田
 作凡粉五斗入五千俵余、其外産之諸式物成有之、何方の村にも凡是に麿じ
 て土産あり。又濱付の村には海中より上る所の産物等、中々山付の村の十
 倍はあるよし、惣而土地の豊饒なる事は海山材野共に具足してあれば、実
 に十分の土地と云ひ、海中の宝嶋ともいふべし。

此一件実に俗事ながら土地不案内の人にしらせんために
 文章にかゝはらずあるし置ものなり。

(終)

翌、天保十二年辛丑三月二十二日、上人は草庵を出で、肥後路へ渡り、豊後よ
 り四國を経て、それから浪華、大和、伊勢、尾張にまで旅行せられ、実家へ帰ら
 れた。この旅こそ上人配流後十年、なつかしい父母、親戚、故旧などに、久しぶ
 りで面会せられ、実に感慨無量なものであつたであらう。

当時「夢還故郷」の詩は、この時の旅を、夢中に故郷に帰るといふ事にして書
 かれたものであつて、この長詩には故郷の風物もよみ込まれてゐて、私達にとつ
 てもなつかしいものである。

前書

卯月中の九日といふに旧國双親の元へ着しける。それより前後
 いろいろ物かたりあれ共、今は略して、只夢中に故郷へ帰ると

いふことにして賦しけるからうたあれば、是をこゝにしるし侍
る――

夢還故郷

西洋爲客十餘年　白歎病身偏可憐
常鎖柴扉空獨居　屢懷旧事轉惘然
誰知一夜幽窓夢　積水忽乘千里船
八嶋月明松吹響　九州潮滿海雲連
浪華市上潛行去　河内道中傾笠還
輕步直登南都外　旅亭殊想北京邊
前途從此遵間徑　杖屨銜笻到勢陽
帆影逐風過七里　金城映日動三光
琵琶川沿水長堤路　富嶽凌天樹色蒼
小折村前思學友　碑銘丘畔見荒亡
夕陽漸落街昏黑　新月帶雲天渺茫
回首桑田猶似昔　整綫問步夜歸鄉
扣門僮僕驚開戶　秉燭兄甥喜立迎
先問雙親矍鑠體　復聞家族壯安聲

十年離別同無異
竹馬多成泉下鬼
飛文走使招知己
設席傾樽歡笑語
醉來謾話浮沈事
志學青雲許故國
訂園台下留名譽
攝錄門庭開錦繡
鳳翔宣堂遊北闕
胸中意氣清如水
豈處謾謾同坐石
一朝反覆承嚴譴
身在南田總不煩
數行春雁悲蘇武
水滿時移談未盡
殘燈無焰看彷彿
更轉孤枕搔首處

今夕相逢共述情
信朋皆是白髮生
妹姪褰衣集屋中
舉盞握手酒顏紅
分座方開一始終
避塵探勝索成功
祇樹林頭后得道
將軍城郭會豪雄
龍衛室王出南宮
世上全盛似徵風
謾言好就忍何窮
多歲勤勞忍作空
必思此地后傷神
四圍秋光泣楚巨
鍾聲響去報清晨
座客低頭各入真
鵝鳴破睡淚泊襟

金城琵琶川是則尾國之名跡在富嶽小折碑上皆余鄉里之近遺故

其後、上人は安らかに庵で、古事記、日本書紀など専心読破された。

上人が天竺の島民や村童を集めて読書、算数などを教へつけたのは何年頃か明瞭ではないが、集つて来て教を乞ふ者には、此の頃、盛に快く教導されたらしい。

又上人は醫學（漢法）に秀でてゐられた。めに、現存の上人の遺物中にも「医書」は沢山あるが、上人は始終島民の病苦に悩んでゐるものには快く施療してゐられた。そのため町の教育と共に、島民から常に尊敬せられてゐられた。そ
上人が後年の政郷への通信など今にも残つてゐるが、それにも常に「素草」「治案」に関する記事が載せられてあり、又「奇法隨筆」など、いふ著書もある。

弘化四年、上人は再び政郷へ歸られた。上人すでに四十七歳。この度の歸郷は、恐らく最後であらうと思はれたらしく、「留別章」といふ美麗判紙八枚綴の書きものを残して云られた。勿論尾崎の実家で脇田家の左のに書かれたものである。

子規何事盡情啼
再會難期他世外

萬里雲山隔楚齊
離章催淚不堪題

石丁未夏日留別

殘夢道人草

ことさらに今日のわかれをしむなり

またあふときのさだのなければ

鳴きすて、行くや五月のほととぎす

殘夢

きはながく、こゝろはひろく、よくうすく、隆儀たゞしく
身は下におれ。

これは屋のあまりありければ序にしるすものなり。

なほ裏面には、「尾崎・脇田氏」と記されてある。

越えて嘉永元年、天草島の上人の門人匡は上人の将を定説した。当時上人の記

録に依ると、長崎大音寺境内の碑と云に各々十六両程も初入リがあつたが、天
草のはすべて門人達、長崎のは茅の人々の寄進によるものであると記されてあ
る。

天草のは、臨川庵から約一丁を距てた清瀧山信福寺の境域中にあつて、亀石
石の上に經卷狀の圓筒碑が建てゝある。信福寺は淨土宗で、現在約二百の信徒を
有するといさゝやかな寺ではあるが、永祿以前には領主天草伊豆守の菩提寺（元
は天台宗）として國內百數の名刹であつた。

碑の前面

南無阿弥陀佛

淨土門主
茅越王筆

次に書きまはしにしてた記の碑文がある。

清淨香院法眼前大信都定舜和尚諱念蒼字真空號大通今尋運社稱阿則傳
燈之嘉名也。華頂山誠譽大信正之孫常三昧院觀譽上人之資也。延源稱
脇田分尾陽金鱗城北丹羽郡尾崎町人也。有由緒而爲石井中納言行宣卿
嫡子也。夙淨宗之業成而拜請賜香上人之綸命兮。當承事於淨土之門主

照耀法親王累年也。頻蒙勅詔被補王室之住持院家遂叙法眼任少僧都復轉任大僧都而三參。内拜賀今又爲宗王之便節即下于東武而詣於御營而拜謁台顏也。師修道之餘暇殊好吟哦性愛風流矣。天保壬辰之秋有故而來于此境更稱殘夢道人即有偈有歌曰

身猶如毛

意廣如空

王城春花

還處秋霧

一世浮沉

百年吟弄

恩焉惟焉

是夢是夢

雲となり雨ともなりし旅の空

むかへたまへよ南無阿彌陀佛

今茲己酉春、華頂法王悉沐華毫而手書六字宝號兮。特命侍臣正六位下攝州刺史藤誠之道人墓牌然以爲清龍山十七主禪營指定法系納於遺骨冢中故以立稱矣

大學頭

藤原

實嘉

法印千手院

美隆 詔

この信福寺の上人の墓碑々文から更に懐ひ出されるのは尾張尾崎村の上人の碑

である。この碑が尾崎村到着期日は不明ではあるが、やはり殆んど同一の形式であるので、やはり尾崎の碑は同時に製作されたものであらう。左に尾崎の碑文を示してみよう。

(表面)

知恩院宮御筆

南無阿弥陀佛

荊大僧都
定舜上人

やはり經卷狀の円筒碑で、台石は亀形ではない。書きまはしの碑文は左の通りである。

師諱定舜字真空號大通号專運社念譽
稱阿耨運門傳燈嘉名也俗姓源氏賜田
喜左衛門義道子也幼稚而上洛有所緣
而爲后并前中納言行宣卿猶子也吉水
起信大僧正資則入門主侍讀之院家
常三昧院觀誓上人之室修證功成而拜
賜香上人之論命也嘗奉事于華頂